

恐恐謹言。

建治二年^①丙子

大井莊司入道殿

日蓮花押

二〇九 阿佛房御書

御文委披^{フミ}見いたし候畢^ヒ。抑寶塔^モ御供養物、錢一貫文、白米・しな^①なをくり物、たしかにうけとり候畢^ヒ。此趣御本尊法華經にもねんごろに申上候。御心やすくおぼしめし候へ。一御文云、多寶如來涌現の寶塔何事を表し給^ツやと云云。此法門ゆゑしき大事な^①り。寶塔をことわるに、天台大師文句、八に釋し給^ヒ時、證前起後の二重の寶塔あり。證前は迹門、起後は本門なり。或又閉塔は迹門、開塔は本門、是即境智の二法也。しげきゆへにこれををく。所詮三周の聲聞、法華經に來て己心の寶塔を見ると云事也。今日蓮が弟子檀那又々かくのごとし。末法に入て、法華經を持つ男女のすがたより外

〔系年〕建治二年三月十三日(55) 或文永九年 〔寫〕

朝師本 【刊】外 230 遺 131 縮 825 【註】考 215

①ヒナ+(の) 〇

①建治二年丙子
=二月時正第四
番 〇

には寶塔なきなり。若然者貴賤上下をえらばず、南無妙法蓮華經ととなうるものは、我身寶塔にして、我身又多寶如來也。妙法蓮華經より外に寶塔なきなり。法華經の題目寶塔なり。寶塔又南無妙法蓮華經也。今阿佛上人の一身は地水火風空の五大なり。此五大は題目の五字也。然者阿佛房さながら寶塔、寶塔さながら阿佛房、此より外の才覺無益なり。聞・信・戒・定・進・捨・慚の七寶を以てかざりたる寶塔也。多寶如來の寶塔を供養し給かとおもへば、さにては候はず我身を供養し給。我身又三身即一の本覺の如來なり。かく信じ給て南無妙法蓮華經と唱給へ。こゝさながら寶塔の住處也。經云、有説法華經處我此寶塔涌現其前とはこれなり。あまりにありがたく候へば寶塔をかきあらはしまいらせ候ぞ。子にあらざんばゆづる事なかれ。信心強盛の者に非んば見する事なかれ。出世の本懷とはこれなり。阿佛房しかしながら北國の導師とも申つべし。淨行菩薩はうまれかわり給てや、日蓮を御とふらひ給か。不思議なり不思議なり。此御志をば日蓮はしらず、上行菩薩の御出現の力にまかせたてまつり候ぞ。別の故はあるべからず、あるべからず。寶塔をば夫婦ひそかにをがませ給へ。委は又々申べく候。恐恐謹言。